

不気味なコミュニケーション
 ——国際シンポジウム Reconsidering 'Reception and
 Transformation of English Literature in Asia' について——

齋 藤 一

1

本稿は、2010年8月15日から21日にかけて、大韓民国のソウルにある中央大学校において開催された第19回国際比較文学学会大会《Expanding the Frontiers of Comparative Literature》において、¹筆者（齋藤）が企画した国際シンポジウム Reconsidering 'Reception and Transformation of English Literature in Asia' を取り上げ、その意義と各発表者の発表内容に触れつつ、オーガナイザーであった私にとって最重要だと思われた問題について若干の考察を試みるものである。

2

まず、このシンポジウムに至るまでの経緯を簡単にまとめておく。²

アメリカやイギリスにおいて既成概念を問い直すべく隆盛してきた文学理論をただ輸入紹介するのではなく、その理論を英文学という学問そのものに適用しつつ英文学の刷新を試みる必要性を1990年代から説いていた荒木正純（筑波大学教授〔当時〕）は、2001年に科学研究費補助金研究プロジェクト「日本および東アジアにおける英米文学の受容と変容（19世紀・20世紀）」（基盤研究（C）、平成13年度—16年度、研究代表者：荒木正純、課題番号：13610682）を開始した。この研究プロジェクトの成果の一つとしては、2004年、英米文学研究専門誌『英語青年』誌上において、マレーシア、シンガポール、台湾、中国、インド、韓国、日本の研究者による、English Studies Relocated in New Asias という総タイトルのリレー連載（2004年4-9月）が行われたことを挙げるができる。また、2005年3月19日～21日には、

上記リレー連載の執筆者を中心とする国際学会 Reception and Transformation of English Literature in Asia (於：筑波大学) が開催されたことも特筆しておきたい。³

この研究を継続するために、やはり科学研究費補助金研究プロジェクトとして、「アジア (含オーストラリア) における英米文学の受容と変容 (19 世紀—21 世紀)」(基盤研究 (B), 平成 17 年度—20 年度, 研究代表者: 荒木正純 [平成 20 年度は齋藤一], 課題番号: 17320054) が立ち上げられた。タイトルで明らかだが、この研究は先行研究の扱う地理的・時間的範囲を拡大したものである。この研究の主要な成果として、2005 年 3 月の国際シンポジウムの発表を元にした英語論集, Araki, et. al. eds, *English Studies in Asia* (Malaysia: Silverfish, 2007) の出版を挙げることができる。また、2008 年 9 月 26-27 日、国立台湾大学 (台北市) と筑波大学との共催で、国際学会 Reception and Transformation of English and American Literature in Asia (於：国立台湾大学) が開催されたことも重要な事業であった。⁴

これらの研究の大きな成果は、アジア諸国における英米文学の受容と変容がいかに多様であるかを具体的に確認できたことであり、その成果 (の一部) を英語によって日本国内のみならず国外にも発信できたことである。参考までに、この多様さの具体例として、2004 年の『英語青年』リレー連載と 2005 年の国際シンポジウムを元にして編集・出版された *English Studies in Asia* に収録された論文タイトルを以下に列挙する。⁵ なお、肩書きは 2007 年当時のものである。

Yoshihara, Yukari (Tsukuba University [Japan]), 'The Past, the Present and the Future of the Project, "English Studies in Asia"' (pp.9-23)

Araki, Masazumi (Tsukuba University [Japan]), 'How a Sausage-Like Nose of a Priest was Conceived' (pp.24-34)

Chakravorty, Swapan (Jadavpur University [India]), 'Shakespeare and Colonial Modernity in Bengal' (pp.35-59)

Chan, Felicia (University of Ulster [UK]), '"English" versus "Literature": the Place of English Literary Studies in Singapore' (pp.60-74)

Cho, Kyu-hyung (Korea University [Korea]), 'Can the Emergency Period be an Emergent Period?: An Overview of the Trends and Prospects of English Language and Literature Education in Korea' (pp.75-86)

Ding, Ersu (Lingnan University [China]), 'Re-Canonization of English Literature in China' (pp.87-101)

Kim, Moran (Tsukuba University [Japan]), 'Irish Drama and the Construction of Korean National Identity: the Case of Chi-jin Yu' (pp.102-118)

Li, Hsin-ying (National Taiwan University [Taiwan]), 'Forty Years of American Literary Studies in Taiwan' (pp.119-134)

Lim, Chee Seng (University of Malaya [Malaysia]), 'English Studies in Malaysia' (pp.135-144)

Minami, Ryuta (Aichi University of Education [Japan]), "'No Literature Please, We're Japanese': The Disappearance of Literary Texts from English Classrooms in Japan' (pp.145-165)

Motohashi, Tetsuya (Tokyo University of Economics [Japan]), 'Current Situation in the Studies of English Literature in Japanese Universities: Can Cultural Studies Offer the Alternative?' (pp.166-179)

Saito, Hajime (Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine [Japan]), 'Let Us Open Our Paragraph' (pp.180-190)

Saito, Yoshifumi (University of Tokyo [Japan]), 'English Studies in Japan at the Crossroads' (pp.191-198)

Taskin, Sema (Bilkent University [Turkey]), 'English Departments in Turkey: Past, Present, and Future' (pp.199-203)

Tope, Lily Rose & Ick, Judy Celine (University of the Philippines [Philippines]), 'Escaping Engagement, Escaping Escape: English Literary Studies in the Philippines' (pp.204-227)

Trivedi, Poonam (University of Delhi [India]), 'English Literary Studies in India: "Handcuffed to History"' (pp.241-246)

3

以上列挙した研究成果を踏まえつつその問題点と今後の課題を探るため、齋藤は第19回国際比較文学会の分科会として Reconsidering 'Reception and Transformation of English Literature in Asia' を組織し開催した（2010年8月19日と20日）。当初は9人が参加する予定であったが、最終的には齋藤の他、吉原ゆかり（筑波大学）、平石典子（筑波大学）、波瀾剛（九州大学）、

Cui Wendong (University of Hong Kong) の5人が参加した。以下、当日会場で配布された *Abstracts*⁶ を参照しつつ各発表をごく簡単に紹介する。

Hajime Saito, ‘Introduction: “Reception and Transformation of English Literature”, 2004-2010’

本シンポジウムに至るまでの研究成果について紹介した。本稿第2節で述べた内容と重なるところが多い。

Noriko Hiraishi, ‘Empathizing with Dante and D’Annunzio: Italian Literature in Meiji Japan (1868-1912)’

明治時代の日本の知識人は、自己形成のため、西洋諸国の知識人と同一化（した後は差異化）しようとした。この点、日本の知識人とダンテならびにダンヌンツィオのケースは興味深い。明治期の日本におけるイタリア文学の受容と変容を見てみると、「アジアにおける英米文学の受容と変容」が主として扱ってきた英米文学のそれと興味深い違いがあることがわかる。

Tsuyoshi Namigata, ‘The Showa Modern in East Asia – Erotic, Grotesque, Nonsense and Translation between Cultures’

日本文学の余白／辺境 (margins) で研究をして来た私 (波瀾) は、これまで西洋から (日本もその一部である) 東アジアに翻訳を経由して輸入された「近代」の重要性を分析してきた。本発表では特に昭和初期 (1926年～45年) における「エロ、グロ、ナンセンス」に注目し、日本の近代の意外な側面を照射してみたい。

Cui Wendong, ‘When Robinson Crusoe Came to China: Reception and Transformation of Robinson Crusoe in Late Qing’

清朝末期 (1898～1911年) の中国では、史上類を見ないスケールで外国の小説作品が翻訳されたが、これは鑑賞というよりはむしろ教育を目的としていた。この時期もっとも人気があった『ロビンソン・クルーソー』も同様であった。この作品は多くの翻訳者を魅了したが、それはロビンソンの冒険心が国民救済と政治改革に役立つと考えられたからであった。これらの目的を果たすため、翻訳者たちは西洋の文化を知らず中国の文化におごりを感じていた読者の嗜好やイデオロギーに合わせて様々に書きかえ

た。これらの翻訳はすべて中国の文化と社会の革命に貢献したが、中国史上もっとも多産であった翻訳者、林紓 (Lin Shu, 1852 ~ 1924) の翻訳のみが原作の文学的な要素を残していたため、読者に真の外国文学の存在を伝え得たのであって、人気も高かったのである。

Yukari Yoshihara, 'Rethinking the Boundaries between the Canonical and the Trashy Pop – Case of Manganized Shakespeares'⁷

シェイクスピアとマンガが会合するとき何が起こるのか。シェイクスピアは良かれ悪しかれグローバルであり、遍在する。同時に、彼の作品は「土着化」(gone native) してきたのであって、地域ごとの文脈や関心に応じて変化してきた。その結果、我々は奇妙なハイブリッド (混成体) —西洋と東洋の、(シェイクスピアに代表される) 高級文化と (マンガに代表される) 大衆文化のハイブリッドを手になっている。例えば、シェイクスピア『テンペスト』のポルノ版マンガ (日本語) の中国語訳が、『ロミオとジュリエット』を元にした日本の SF アニメのアメリカ・やおい版が、存在する。私たちはこういうものをどうすべきだろうか。

Hajime Saito, Thoughts on Reconsidering 'Reception and Transformation of English Literature in Asia' (内容は本稿第 4 節で詳述する。)

これらの発表についての詳細な紹介と議論は、来年度に出版する予定の英語論集において行う予定であるので本稿では割愛したい。以下、このシンポジウムを締めくくった私の発表、'Thoughts on Reconsidering 'Reception and Transformation of English Literature in Asia' の内容について紹介する。というのも、この発表にはこのシンポジウムを組織した意図や問題意識、そして試行錯誤の結果が盛り込まれているからである。

4

本稿の第 2 節と第 3 節でごく簡潔に紹介したように、「アジアにおける英米文学の受容と変容」という研究プロジェクトによって、日本、中国、台湾、インド、シンガポール、マレーシア、トルコ、フィリピンといったアジア諸国の研究者の協力によって、「アジアにおける英米文学の受容と変容」の多様性を

確認できた。しかし、この研究プロジェクトをすすめるにつれて問題点も顕在化してきた。そしてそれらの問題に対して上述のソウルのシンポジウム参加者はそれぞれの立場から検討をおこなった。⁸ただし、私見では最大の問題は英語使用に関する問題である。約言すれば以下になる。——これまで紹介してきたような多様な事例の積み重ねだけでは単なる骨董趣味に堕してしまう可能性がある。こうした可能性を回避するためには、アジア諸地域のみならずそれ以外の地域の研究者も議論に参加できるように工夫し、情報と議論を公開する必要がある。そのため、「アジアにおける英米文学の受容と変容」プロジェクトにしてもシンポジウムにしても英語を用いて資料を翻訳し議論の発信を試みている。しかし、やむを得ないとはいえ、こうした英語使用のために非英語圏の読者よりも英語圏の読者の方が圧倒的に情報にアクセスしやすくなってしまっているのである。

この問題は、次のように言いかえてもよい。——19世紀から今世紀に至るまでの間、英語圏諸国で生み出された作品をアジアが「受容」という歴史がある。そしてこの歴史には英語圏諸国＝主体、アジア諸地域＝客体という非対称性が刻み込まれている。無論、この構図に異議申し立てをするために本プロジェクトは存在する。英語圏の英語作品を「受容」してきた客体としてのアジア諸地域の人々がそれらをいわば主体的に「変容」させてきたこと、そしてその変容（あるいは奪用 *appropriation* という言葉を当てても良いかもしれない）の産物を、英語圏／非西洋（アジア）という非対称的構図を転倒あるいは脱構築する可能性を秘めたものとして評価してきた。しかし、アジア諸地域における様々な言語や文化において「変容」を遂げた英語作品についての知識をどのようにしてアジア諸地域ならびに英語圏諸地域において共有したらよいかという問題は残る。結局、英語を使わざるを得ない。事実、2010年8月のシンポジウムでも口頭発表は英語を使用せざるを得なかった。つまり、「受容」を「変容」によって乗り越えようとしても、この乗り越えの試み自体は英語を「受容」せざるを得ないのである（これはシンポジウム参加者のみならずフロアの聴衆も共有していた問題であった）。ヨーロッパのメジャー言語を中心とした比較文学に根源的な批判を突きつけてきたガヤトリ・C・スピヴァクの「そもそも「ネイティヴ・インフォーマント〔現地人の情報提供者〕」はメトロポリスの言語に基礎を置いた仕事とは毛色の違った「文化研究」の主体となることができるのか」という問いを真剣に考えざるを得なくなったということである。

では、異なる言語・文化的背景をもつ研究プロジェクト参加者には研究発表を自らの母語において発表あるいは執筆するように依頼しつつ、それを英語により同時通訳し原稿の英訳を対訳形式にして出版すべきだろうか。これは理想への一歩かもしれないが、実現は非常に困難である。現実的に、我々はなにをどうしたらよいのだろうか。

ここで一つのエピソードを記しておきたい。8月15日の夜、歓迎会の一環として、韓国の伝統的演劇であるパンソリ版の『ロミオとジュリエット』が上演されたが、私たち参加者はそれを観劇する機会を得た。この公演そのものについての評価をする力は演劇研究者ではない私にはないが、「アジアにおける英米文学の受容と変容」の多様さをどのように、そして誰に向けて伝えたらよいのかという問題に没頭していた私にとって、大変示唆に富むものであった。

この公演が終了したあと、吉原ゆかりは有名な SNS (Social Networking Service) である Facebook に次のようなコメントを英語で掲載していた。日本語に翻訳して引用する。「考えたんだけど...これってシェイクスピアの翻案なんだろう、それともパンソリの翻案なんだろう、それともそのあいだのどこかなんだろう、それともシェイクスピアと周辺的なポップな非英語〔作品〕をラディカルに脱構築しているんだろうか?」¹⁰——私はこのコメントの「そのあいだのどこか (somewhere-in-between)」という言葉を読んで、この公演の私にとっての意義をおぼろげながら感じる事ができた。

実は、この舞台の左脇には字幕セットがあり、画面の上がハンゲルによる台詞、下が英語 (ハンゲルの翻訳) であった。これは国際比較文学会の参加者の多くが韓国語を理解せずハンゲルも読めないことへの配慮であったと思われる。私自身、韓国語は分からずハンゲルも読めない。したがって、私としては、理解出来ない発話が朗々と響く舞台を観つつ、左側のモニターをも注視していたわけなのだが、しかしハンゲルも読めないため、結局のところ英語を読む他なかったのである。このとき感じたのは、もし主催者側にもう少し時間と資金と人的な余裕があり、また韓国語やハンゲルを「外国人」にも多少なりとも理解してもらおうという意志があれば、モニターを三段にして、一番上はハンゲル、二番目はハンゲルのアルファベット表記、三番目は英訳にしてくれたらよかったのに、ということである。

まず、理解できない韓国語が耳に入る。そこでハンゲルの字幕を観る。分からない。次にハンゲルのアルファベット表記を見る。そこでハンゲルの発音分かる。残念ながら韓国語の意味は分からない。発音しか分からない。しかし、

その発音がアルファベットによって分かれば、ハングルの読み方が徐々に分かってくるかもしれないという期待が高まってくる。つまり、ハングルを自分には理解不能な記号として放置するのではなく、すくなくとも、アルファベットの助けを借りて、その音は把握できるようになるかもしれないという期待をすることができるのである。もしかすると、やがてはハングルを、そして韓国語を多少なりとも理解できるようになるかもしれないという希望を持てるかもしれない。つまり、ハングルのアルファベット表記という中間的なものは、完全に韓国語／ハングルが理解できないという状態からそれが理解できるという状態への橋渡しをしてくれるのではないだろうか。しかし、8月15日の公演にはその中間的なものがなかったのである。

重要なのは、ハングルのアルファベット表記はハングルでもなければ英語でもない、そのどちらでもない中間にあるなにかである、ということだ。純然たるハングルでもなく、純然たる英語でもなく、中間的なもの。それはハングル（韓国語）と英語という言語の純粋性を揺さぶるものかもしれない。

試みに、その中間的なものを実際に示してみたい。以下の表は、「アジアにおける英米文学の受容と変容」プロジェクトの当初から積極的に関わってきた南隆太（白百合女子大学）を中心として進行中の大規模で画期的な日英同時出版事業、Minami Ryuta, Ed. *Shakespearean Adaptations in East Asia: A Critical Anthology of Shakespearean Plays in China, Japan, Korea and Taiwan*, 5vols. (Tokyo: Eureka Press; London: Routledge, 2011 [forthcoming])¹⁰ の宣伝パンフレットの一部分を日本語、日本語のアルファベット表記（齋藤が作成）、英語訳（拙訳）の順に並べてみたものである。

<p>近年、日本のみならず、中国、台湾、韓国などで制作されるシェイクスピアの舞台に対する関心は世界的に高まってきており、国際演劇祭において、こういった東アジアの劇団によるシェイクスピアの翻案作品やシェイクスピアに想をえて創られた作品が上演されることは珍しいことでなくなっています。</p>	<p>Kinnenn, Nihon nominarazu, Chuugoku, Taiwan, Kankoku nadode seisaku sareru <u>Sheikusupia no butai ni taisuru kanshin ha sekaiteki ni takamatte kiteori, kokusai engekisai ni oite, kouitta higashi Ajia no gekidann niyoru Sheikusupia no honnannsakupihinn ya Sheikusupia ni souwoete tsukurareta sakuhin ga jyouen sareru kotoha mezurashii koto deha nakunatte imasu.</u></p>	<p>Recently, worldwide attention is paid to <u>Shakespeare dramas</u> produced not only in Japan but also in China, Taiwan and Korea. It is not uncommon to see, in international drama festivals, drama performances inspired by East-Asian adaptations of Shakespeare works.</p>
--	--	--

下線で強調した「シェイクスピア」は日本語であり“Shakespeare”は英語であり、そして“*Sheikusupia*”はそのどちらでもなくどちらにも近接している。この“*Sheikusupia*”を英語圏の読者はどう読むだろうか。何を感じるだろうか。単なるノイズとして排除するのだろうか。それとも英語と日本語という言語の間の非対照的な格差を英語圏・非英語圏の人々の協業によって調停する試みとして了解することもあるだろうか。

ここでもう一度スピヴァクの意見を参照してみたい。「おずおずと相手の機嫌をうかがうような身振りにたいする代替的選択肢として、また、世界文学地図なるものを作成してそれを翻訳で読むことをもって比較文学の仕事であるとするような据傲な態度にたいする代替的選択肢として」、¹¹——比較文学者がメジャー言語ではない世界各地の言葉を出るだけ学ぶのは当然としてもそのことを敵対的に強調するのでもなく、メジャー言語である英語による優れた現地語の翻訳を読みさえすればいいという知的怠慢に陥ることもなく——“planetary”（惑星的）という、“global”（グローバリゼーションに関わる）と“local”（マイナーな現地語を出るだけ学ぶという態度に関わる）のどちらにも関係するがどちらからもずれてしまう言葉をあえて使ったスピヴァクは、興味深いことにフロイトの不気味さに関する議論に触れている。

この言葉〔齋藤注：“planetary”（惑星）〕は、わたしたちが慣れ親しんできた居住空間を uncanny なものにするであろうか。いうまでもなく、わたしがここで思い浮かべているのは、英語の日常語における“uncanny”ではなくて、アリクス・ストレイチャー〔原注：英語版フロイト著作集の訳者〕がフロイトの用語“unheimlich”をそう訳したもののことである。それは、わが家同然に居心地のよいものが、なにか“unheimlich”なもの—不気味なもの／疎遠なもの—に一変することを意味している。言葉についてこのように考えることは、それ自体が比較文学の学問的訓練である。¹²

比較文学においては記述するための手段でもあるが研究対象になることも多い日本語における「シェイクスピア」でもなく、記述する手段になることが多い英語における“Shakespeare”でもない、しかし両者の痕跡を残している不気味な“*Sheikusupia*”。この“*Sheikusupia*”のような言葉からなる不気味なテキストを私たちの「学問的訓練」としての英語論集出版に取り込むことはで

きないだろうか。もしそれが可能になれば、このような中間的存在を含み込んだ発信は、「アジアにおける英米文学の受容と変容」の多様な事例を英語によって発信するときに、どうしても失われてしまう多様性のある存在のあとだけは伝えることができるのではないか。

私はソウルから帰国後、*Shakespearean Adaptations in East Asia* の存在しない第六巻目が、本稿で示したような三つのコラムからなる不気味な巻であってもよいのではないか、そしてそれが東京とロンドンで同時に発売されることがあってもよいのではないかという夢を抱き続けている。無論、このような不気味なコミュニケーション、あるいは不気味さを基盤としたヒューマニティーズは、規模はどうあれ夢で終わらせてはならないのである。

注

1. 大会の情報は以下のサイトを参照せよ。http://icla.byu.edu/www/congress/index.html
2. プロジェクト誕生の経緯の詳細については次の論考を参照せよ。Yukari Yoshihara, "The Past, the Present and the Future of the Project, 'English Studies in Asia'", Araki et al. eds., *English Studies in Asia* (Kuala Lumpur: Silverfish, 2007), pp.9-23.
3. この国際シンポジウムの HP の URL は以下の通り。http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/~bungaku/index1.htm なおこの HP では当日の口頭発表の概要（英語）も読むことができる。
4. シンポジウムの HP の URL は以下の通り。http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/~rtelat/
5. 2008年8月の国際シンポジウムの口頭発表タイトルは列挙するには多すぎるので、以下の URL (http://d.hatena.ne.jp/hspstcl/20100814) に PDF ファイルで掲載しておく。なおこのブログサービス「はてな」のページは本研究プロジェクト（通称 RTEALAT）の暫定 HP として運用しており、本稿で紹介したウェブサイトの URL などをまとめてある。キーワード「RTEALAT」で検索すると容易にアクセスできる。
6. *Abstracts of The XIXth Congress of the International Comparative Literature Association: "Expanding the Frontiers of Comparative Literature"* (Korean Organizing Committee of ICLA 2010)。
7. Abstracts には掲載されていないが、発表予定者の予定外の欠席により、吉原は以下の発表をおこなった。Yukari Yorhihara, 'Julius Caesar in British / American and Japanese culture' (2010年8月19日)
8. 例えば平石は明治期のダンテやダンヌンツィオの受容における「恋愛」の問題を強調しつつ、イタリア文学と英米文学との「受容と変容」の差異を指摘した。また波瀾は少なくとも20世紀においてはヨーロッパと日本はほとんど同時に文化事象を経験していたことを指摘し、「受容と変容」という時間差を前提とした

研究パラダイムを相対化してみせた。

9. G・C・スピヴァク『ある学問の死—惑星思考の比較文学へ』（上村忠男・鈴木聡訳、みすず書房、2004年）、16–17頁。
10. 原文は以下の通り。“i am wondering: is it an adaptation of Shakespeare, or an adaptation of pansori, or somewhere in-between, or radically deconstructing the binary of Shakespeare and marginal pop non-english?” (Facebook, 「吉原ゆかり」のページ [<http://www.facebook.com/profile.php?id=1425373627>]) の8月15日の投稿へのコメント欄（8月16日1時49分投稿）より引用。最終閲覧日：2010年12月23日
11. Routledge社のHPでの紹介記事は以下を参照。<http://www.routledge.com/books/details/9780415575973/>
12. スピヴァク前掲書、126頁。
13. 同上、126–127頁。